Osaka University Knowledge Archive

Title	大都市市街地内古集落における地域環境構造の変容とその持続可能性に関する研究
Author(s)	柴田, 容子
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45906
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【113】

氏　　名	柴　田　容　子（しば　た　よう　こ）
博士の専攻分野の名称	博　士（工　学）
学　位　記　番　号	第　１９５５１　号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 工学研究科環境工学専攻
学　位　論　文　名	**大都市市街地内古集落における地域環境構造の変容とその持続可能性に関する研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　鳴海　邦碩 （副査） 教　授　澤木　昌典　　助教授　鈴木　　毅

論文内容の要旨

本研究は、地域性に配慮した環境整備へのニーズの高まりと、日本の都市政策における市街地の歴史的継続性に対する着目の弱さを背景とし、市街地内において都市開発を免れ集落形態が存続している「古集落」を研究の対象とした。大阪市内の古集落は、大都市にありながら歴史的景観や地域に根付いた生活文化を継承している一方で、周辺では活発な市街地整備の動きが見られる。そこで、市街地における古集落の環境特性を明らかにし、その整備のあり方の再検討に資する知見を得ることを目的とした。本論文は、本編５章および序章と終章からなる。

序章では、本研究の背景と目的、研究の構成などについて記述した。

第１章では、明治初期に大阪市域内に存在した周辺集落の形態の特徴を把握した上で、市街化の概要を整理するとともに、周辺集落の消滅と変容の過程を明らかにし、大阪市内に現存する古集落を明らかにした。

第２章では、集落形態が存続していることが明らかになった古集落の周辺において、社寺および池の変容、基盤整備事業の施行と町会領域の変容に着目し、市街化の展開によって生じた古集落の地域環境の変容について考察した。

第３章では、土地利用の変化や居住者の移動、歴史的景観を構成する住宅の存続状況などについて調査・分析し、個別開発の積み重ねによって生じている古集落空間の変容について明らかにし、その景観の変容の可能性について考察した。

第４章では、まず大阪市域に存在する全ての古集落の地域コミュニティ活動と組織の現状を明らかにした。その上で伝統的祭りに焦点を絞り、運営構造および参加者と居住者の評価を明らかにすることにより、伝統的祭りが地域コミュニティの形成に資する可能性について考察した。

第５章では、地域居住者と古集落環境との関わり方を明らかにするため、古集落および周辺の居住者に対するアンケート調査を行い、古集落環境の管理・利用の実態と古集落環境に対する評価を明らかにした。その結果から、地域居住者にとっての古集落環境の役割や意味について考察した。

終章では、以上を総括するとともに、大都市市街地内において古集落が持続する可能性と課題について考察し、これを地域の核とし、周辺と一体となった環境整備のあり方について展望した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、大都市市街地内において、明治初期に存在していた集落形態を持続させている集落を「古集落」と定義し、大阪市域を対象としてその実態を明らかにするとともに、周辺の市街化と関連性を持ちつつ形成されてきた空間とコミュニティの特性を分析することを通じて、古集落環境を持続させ、地域環境の核として活かしていく方策について考察したものである。得られた結果を要約すると以下の通りである。

(1) 明治 20 年と現在の地図の照合を通じて、大阪市域に存在していた全 211 の集落のうち、133 集落が基盤整備等によって集落形態が滅失または大きく変貌し、それを免れた 78 の集落も将来の改変に巻き込まれる可能性のあることを明らかにしている。

(2) 古集落内に存在する社寺は、市街化の展開とともに周辺住民の教育・交流施設を内包してきた実態があり、地域住民が、今後も、社寺境内の存続およびその利用を望んでいることを明らかにしている。

(3) 周辺の市街化が早かった古集落と近年になってそれが生じた古集落を対象とした分析を通じて、前者では細分化された町会域が形成され、後者では住宅団地等を除外しながら広範囲の町会域が形成されていることを明らかにし、祭りなどの伝統的なコミュニティ活動が、前者では時代時代に流入し定着した多様な住民によって担われ、後者では旧来からの住民と町会域内の新来住民によって担われていることを明らかにしている。

(4) 古集落の総合的な住み心地に関する住民の評価は高く、さらに環境・景観特性に対する住民の評価および保存意向も高い一方で、この特性をもたらしている路地空間の保存意向は低いことが明らかになり、環境整備に当たって、従来的な手法にはなかった計画・設計技法が求められていることを指摘している。

(5) これらの知見を踏まえて、古集落を核とした地域環境整備にあたり、都市計画・都市設計上、配慮すべき諸点を整理するとともに、街並み形成のデザイン技法、古集落環境の住民によるマネジメント手法の可能性等について示唆している。

以上のように、本論文は、これまで注目されなかった大都市市街地内の古集落の空間およびコミュニティの特性に着目し、大都市市街地環境の整備およびコミュニティの活性化方策の新たな視点を提案しており、環境工学の発展に寄与するところ大である。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。